

宗教家となつて、師匠や父母を喜ばせたいと思つた。然しそれが永く續けばよいのだが、元來が三日坊主の代表者だもの、二日の間は自奮自勵もするが、三日となると如何ともする事の出来ぬ意氣地なした、己一人でさめたのではない、己と文際してゐる男は皆、己を意氣地なしと心得てゐる。兎に角物は例した、明日から精々やつて見やう。

要するに、夏は人間が墮落する時だ、節制を失ふ季だ、生來人間は辛捧が弱いから、車があやうい、そこが弱点なのだ。己も自然の理に支配されて居ると思へば泣きたいやうな情けない思ひがある、然し今迄の己の思想や行動に賛成する奴があれば、日本國は亡びるのだ。大聖人の仰せられた『時を待つ可きのみ。』の時は來た、一日も早く奮起覺醒して國土の壯嚴と人類の幸福をはかる宗教家とあつて、己見たよふな、亡國家を破して貰ひたいものだ、さもなければ、己と同じく、墮落坊主の誹りを甘受しなければならぬ時に遭遇するであらう。(終)

## 異體同心

二宮龍忍

吾々人間社會は、諺に云ふ旅は道連れ世は情け。たとひ一枚の着物一粒の御飯でも、皆これ何十人何百人の力と汗の仁慈の賜。互に相寄り相扶けて双方持ちつ持たれつた互に、社會人生の發展がある。宗門とても此通り。本門の御本尊を打仰ぎ、王佛冥合の戒壇を三國一と飾り立て、妙法五字の旗風勇しく、此大日本國を中心に、四海歸妙。世界統一を理想とする上からは、百五十萬の信徒。五千個寺の寺院一視平等自他彼此の心なく、七百年來雄々しくも掲げ來つた金招牌の箔を増し、内外相寄り眞俗打とけ益々宗門の發展宗風護持の計を立つべきである。其祕訣とは外に無い。身體は十人が十人ちがら異て居ても、心は百人が百人ながら同じく一つだと云ふ『異體同心』の四字これである。

こゝに同心と云ふ。誰の心に同心するのか、云

ふまでもなく、一家には小僧さんも居れば番頭さんも居る。番頭さんが小僧さんの心に同心して好む真似をし、小僧さんも番頭さんに同心して勝手なこと計りしては、家は亂脈、商賣は出来ぬ。小僧さんも番頭さんも、等しく主人の心を心とし主人に同心してこそ、家も圓満商賣も繁昌と云ふもの。四十七士は大石良雄一人の心とあつて亡君の追善を完うした。宗門に先師先哲學者信徒僧俗と種々雑多に仕事も分れ身體も違ふ。されど、宗門たる一家族の主人は誰である。一城一國に譬れば其の城主國主は申すまでもなく、大聖人の外にならぬ。されば『日蓮ト同意ナラバ』と仰せられ、『日蓮ガ一類ハ異體同心ナレバ人々少ク候ヘドモ大事ヲ成ジテ一定法華經弘マリナント覺ヘ候』とも、『日蓮ガ弟子檀那自他彼此ノ心ナク水魚ノ思ヲナシテ異體同心』なれ、『若然ラバ廣宣流布ノ大願モ叶フベキモノ歟』と日蓮ガ弟子ノ中ニ同體異心ノ者之アレバ城者トシテ城ヲ破ルガ如シ』と、御誠め下されて居る。

既にかく同心しまゐらせた上からは、自分と同じく同心して居る同志者同主義者を互に供養恭敬尊重讚歎し、涅槃經の『内ニハ智慧ノ弟子アリテ佛法ノ深義ヲ悟リ外ニハ清淨ノ檀越アリテ佛法久住』する道理。大聖人の道を修行するものは、正しく其の道を教授して下さる善智識を正師と仰ぎ、道を修行する同行者同志者は『忘レテモ法華法ヲ持ツ者ヲ互ニ毀ルベカラズ』と、『法華經ノ功德ハ讚ムレバ彌功德マサル』との御教を體し互に相策勵し、互に扶助誘掖し、内は正法を護持し、外は侮を禦がねばならぬ。『同行讚美』とはこれである。五指の交々彈かんよりは一拳に如かず。一人一人の力は以て一つの大きな力に及ばない。我等は大聖人の仰を其儘に上は教授の善智識。下は外護の善智識。同行相倚り相扶上下等しく大聖人の心を心とし、上下を一つにして時機相應の順風に、乗台船の追手天候大聖人の御指圖船長次第に打任せ、四海歸妙の港に入るやう共に力を添へねばあゝるまい。

以上。